２０２５／１０／２６　　礼拝メッセージ　　大江郷子　牧師

主　　題：　救いの本質と目的　―補足と適用③―
聖書箇所：　Ｉテサロニケ１章９－１０節、創世記３章１－７節

Ｉテサロニケ１：９－１０をお読みしたいと思います。

Ｉテサロニケ１：９－１０

「:9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、:10 また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」

テサロニケの手紙というのは、テサロニケという教会に宛てて書かれたパウロからの手紙です。１：１に「**パウロ、シルワノ、テモテから**」と書いてあります。使徒の働き１７：２に、パウロがテサロニケで三つの安息日にわたって、約３週間伝道したことが書かれています。テサロニケ教会というのは、できてから数か月で、非常に若い教会だったのではないかと言われています。ところが、１：７－８には、「**:7　こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。:8　主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。**」と記されています。このパウロのことばはすごいでしょう。わずか数か月の若い教会なのに、このテサロニケは主のことばを伝えるのに用いられて、彼らの信仰は響き渡っていたと。

そして、彼らの信仰はどうなったのかというのが、９節からの話です。「**私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり**」、またイエスを待ち望むようになったのか――。当初は、この偶像から神に立ち返るというメッセージをしようと思って、偶像について調べたり、立ち返るということについて調べたり、神様の属性について調べていたのです。この「**偶像**」ということばには、「実体のない像」という意味があります。「**立ち返る**」というのは、悔い改めを表すことばが三つあるのですが、そのうちの一つ、「１８０度転換」という意味です。ですから、偶像という実体のない像を礼拝して、それに拠り頼んで、それに喜びを見いだしていた彼らは１８０度転換して、立ち返って、神に拠り頼み、神に満足を見いだし、神を喜ぶ者へと変えられた。それが彼らの信仰ということです。そして神について勉強した時に、膨大な量になってきて、どういうところから話をしたらいいのだろうと考えあぐねていたのです。そして、神以外のものに拠り頼み、神以外のものに満足し、神以外のものに喜びを見いだすというのは、どこから来ているのだろうと考えた時に、Ｉテサロニケはこれで終わって、きょうは創世記３章から、そのことについて皆さんといっしょに学んでいきたいと思います。

神様のみに満足を見いだすということを聞かれた時に、それは当たり前の話で、それに対して「異議あり」と言う方はおられないと思います。しかし、私たちの普段の歩みの中にあっての祈りを吟味する時に、本当に神様が最善だということを私たちが信じて祈りをささげているのかというのが問われると思うのです。なぜなら神様は最善をなされるのに対して「いや、神様、私はこう考えます」、「私はこっちの方が最善だと思います」と、神様に祈る時があります。「神様、こうしてください」、「私の祈りを聞いてください」、「こっちが最善だと思うのです」と。神様はその祈りを全く聞かれないことはないのです。聞かれる時もあるのです。でもそっちの方が逆に怖いです。なぜなら神様が最善をなされていたのに、そうではないものを私たちは求めているわけですから。

たとえばエジプトの奴隷だったイスラエルの民は、エジプトから救い出されて神の奴隷になったのです。ところが荒野で、飲み物も食べる物もない、その時に、彼らは神様にブツブツ文句を言うわけです。神様は何のために私たちをエジプトから救い出されたのか、荒野で私たちを殺すつもりだったのですか、荒野を私たちの墓場にするつもりだったのですかと。そして約束の地を目の前にして、そこに住んでいる民が強大な民であることを知った時に、彼らはヨシュアを打ち殺して、もう一回エジプトに帰ろうと言っていたのです。そしてもう一回エジプトの奴隷になろうと。神様はその中でもあわれみ深く、イスラエルの民にマナを与えられました。そうしたら彼らはまた文句を言うのです。もう毎日甘い物ばかりで、喉が渇いたとか、エジプトには肉があったのに、魚があったのに、きゅうりがあったのに、にらがあったのに、にんにくがあったのに、玉ねぎがあったのに、すいかがあったのにと。神様はそのイスラエルの民の願いを聞かれて、「わかった、では肉をたらふく食べさせよう。もう吐き気を催すぐらいあげよう。しかも１か月間、肉を食べさせよう」と。モーセは聞きました。「神様、歩くことができる男性だけでも６０万人いますよ。女、子どもを合わせたら、物すごい数ですよ」と。「その民に１か月間、肉をたらふく食べさせるのですか、私たちが持っている牛や羊、全部屠っても足らないですよ」と。でも神様は「肉を食べさせる」と言われ、うずらを風で運ばれて、９０センチの厚さに敷き詰められたのです。神様はイスラエルの願いを聞かれました。その時、どうなったかと言うと、民数記１１：３３「**肉が彼らの歯の間にあってまだかみ終わらないうちに、【主】の怒りが民に向かって燃え上がり、【主】は非常に激しい疫病で民を打った。**」と。多くの民が荒野で死んで埋められたのです。実際に荒野が彼らの墓場になった。

ユダの王様、ヒゼキヤ王をご存じですか？ヒゼキヤ王はユダの王の中でも割と良い王様でした。偶像礼拝をやめて、まことの神に立ち返るように民を導いていったのです。ある時、その時の預言者イザヤがヒゼキヤ王のところに来て、「あなたはもう死ぬ」と神が言われたと告げました。その時ヒゼキヤ王は泣いて神に祈るのです。「いや、ちょっと待ってください、私、今死にたくない」と。そうしたら、あなたは死にますよと宣言したイザヤが、ヒゼキヤ王の前から退いて、まだ中庭にいた時に、神から「もう一回戻りなさい」という声があった。神は、「私はヒゼキヤの祈りを聞いた。ヒゼキヤのいのちをあと１５年延ばす」と言われ、ヒゼキヤの腫物の上にいちじくを置いて、彼を癒されました。その後、彼が病気だということを聞いて、バビロンから来ていた使いに、ヒゼキヤ王は自分たちが持っているすべての宝を見せるのです。そのユダの宝がバビロンの目に留まり、それがバビロン捕囚の引き金になるのです。あそこには宝があるぞと。ヒゼキヤ王は神の恵みを自分の権勢と取りかえて、バビロンの使いに誇ったのです。だからイザヤは、なんて愚かなことをしたのだ、あなたがたはやがてバビロンの捕囚になると。

そのヒゼキヤ王の後を継いだのがマナセという息子です。彼は１２歳で王になったのです。ヒゼキヤ王が神に祈った時に、１５年間、いのちを長らえた。ということは、神様に祈っていのち長らえた後に生まれた息子がマナセです。マナセはユダで最も悪い王でした。ヒゼキヤが神に礼拝するようにユダを導いていったのに、死んだ瞬間に、マナセは偶像に立ち返った。神が最善であるのに、私たちが願い求める時に、神の最善がなされない時もある。だから神様が私たちの祈りを聞かれるのは必ずしもいいとは限らない。なぜなら神様が最善だからです。皆さんは、いや、わかっているよ、そんなイスラエルの民とか、ヒゼキヤみたいな極端なことを私たちはしませんよと思われるかもしれない。でも、教会で聞くあかしは、割とそういうものが多いではないですか、正直な話。どなたか前に立ってあかししてくださいと言った時に、「私ね、金銭的に困っていたのですけれども、神に祈った時にね、神様、私に必要を与えてくださいました」、「私、病があったのにね、神様、私の病を癒してくださいました。神様、ハレルヤ！」と。でも、神様の最善は、私たちが貧しさの中で神様の栄光を現すことかもしれない。神様の最善は、私たちが病を通して神の栄光を現すことかもしれない。神以外のものを信頼し、神の最善を信頼しない、それこそまさしく偶像礼拝です。

そのことをずっと追求していた時に、やはり創世記の３章に戻らなければいけないと思ったのです。是非ごいっしょに創世記３：１－７を見ていきましょう。

創世記３：１－７

「**:1 さて、神である【主】が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」:2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。:3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」:4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」:6 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。**」

さて、１節から見ていきましょう。「**さて、神である【主】が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった**」と書かれています。原文を見ると、一番最初に「**蛇**」という単語が出てきます。「さて、蛇は」とか、「そして蛇は狡猾であった」と。「**狡猾**」というのは、「悪賢い」とか「ずるい」とか、「巧妙である」とか、「巧みに人をだます」、「抜け目のない様子」です。何が巧妙かと言うと、サタンはここでエバに対して命令とか強制をしないのです。あなたもう神のことばなんか信用しなくていいよ、私のことばに耳を傾けなさいよと言っていないのです。蛇＝サタンです。サタンは、「本当に言われたの？」と疑問形でエバに語りかけるのです。でもこの疑問形は神様の言われていることと全く違います。２：１６を見ると、「**神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。**」と言っておられるのです。ところが、サタンは「どんな木からも食べてはならないと、ほんとうに言われたの？」と尋ねるのです。２：９には「**神である【主】は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた**」のに、神様はあなたに「それを食べるなと言っているの？神様、ちょっと意地悪じゃない？」と。「神様、ひょっとしてあなたの最善のことなんて考えていないんじゃない？」と。つまり、神様のことばに疑問をはさむのです。これが１節で行われていることです。

ところが、２節に「**女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。**」とあります。女はサタンに何も言われていないのに、自らの意思で神のことばを省くのです。２：１６で神様は「**どの木からでも思いのまま食べてよい**」と言われていたのに、エバは勝手に、「**どの木からでも**」と「**思いのまま**」というのを省いているのです。何が彼女の中に入ったのでしょう。何が彼女をそうさせたのでしょう。人というのは、罪に入る時に、神様が与えてくださった恵みをしっかりと客観的に見る目を奪われています。神様はいかに私たちを恵んでくださって、いかに私たちを愛してくださったかという、その事実を客観的に見ないようになって罪に入っていく。

これは私の勝手な解釈なので、話半分で聞いてほしいのですが、１：３０に、「**また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。**」とあります。ということは、「**地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもの**」はみな緑の草を食べていたわけです。ところが、神は、人には木の実を与えた。特権でしょう？神の恵みですよね。おいしかったと思いますよ。いい香りがするもの、甘いもの、ちょっと甘酸っぱいもの、シャリシャリするもの、ねとっとするもの、サクサクっと食べられるもの、いろいろなものがあったでしょう。そのすべての木を、あらゆる木を食べていいという恵みを神様は人に与えられた。ところが、彼女はその恵みに目を留めずに、しかも神様の「**どの木からでも**」とか「**思いのまま**」というその恵みを削っている。

３節「**しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。**」」と。「**触れてもいけない**」と神様は言われていません。エバは勝手に神のことばを削るだけではなくて、ねじ曲げてきているのです。少し心の中に不満がある人の言い分です。そこまで言われていないのに、いや、触れてもいけないと言われたんですよと。神様はそんなこと言われてません。何をねじ曲げているかというと、「**あなたがたが死ぬといけないからだ**」と言っています。いいえ、２：１７を見たら、「**しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。**」」と書いてあります。「**死ぬといけないからだ**」なんて言っていないのです。勝手にねじ曲げているのです。彼女は、神様の命令に、制限に、心から同意していなかったのですかね。なぜあかんの？と。神様、なぜそれはだめなの、それもいいじゃないと思ったのかな。つまり、この時点で、彼女の心の中にはサタンの声に耳を傾ける準備ができていました。神様を信頼することへの疑い、神が最善であることの疑い。

ところが４節でサタンはこのように言います。「**そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。**」と。サタンはずっと疑問形だったですよね。神様、そんなこと言われるの？と。あなたのこと思ってないんじゃない？という疑いを抱かせ、エバは神のことばをねじ曲げて、そして今度サタンは神のことばを否定してきます。まるでサタンこそがエバの最善を知っているかのように、まるでサタンこそがエバの最善に関心があるかのように。神よりも自分の方があなたの最善に関心を持っていますよと言っているかのように。真っ向からみことばを否定してくるのです。ここでエバは選択を迫られます。神のことばか、サタンの言うことか。神に従うか、サタンの言うことに従うか、どちらかです。でも彼女はもうこの時点で、中立には立てないのです。神のことばをねじ曲げて、確実にもう既にサタン寄りになっています。サタンは神の定めとか命令というのは、神の利己的な、神の意地悪から来る制限や命令だと、エバに思わせたかったのです。ちょっと窮屈だから、もっと自由に生きようよと。神の言うことに従うのではなくて、自分の思いどおりに生きようよ、自分が良いと思うことを選択していこうよと。自分が愛すべきことを選択していこうよ、自分が最善だと思うことを選んでいこうよと。

そして「**蛇が悪巧みによってエバを欺いた**」のです（Ⅱコリント１１：３）。しかし、もう一度見ておかなければいけないことは、確かにサタンはエバを欺いたけれども、エバは自らの選択によってそれを選んでいます。何もサタンに強制もされていないのに、勝手にみことばを削って、勝手に神のことばをねじ曲げた。エバはサタンの言うことを断固として拒否できましたよね。条件としては、私たちよりもはるかに恵まれていませんか。私たちには罪があるでしょう。でも、エバにはその時罪がなかったのです。しかも彼女は神を知っていたのです、エデンの園で。神こそが最善であり、神様は最善そのものだということを彼女は知っていたわけです。彼女のまわりの環境は、神の恵みと祝福であふれていたのです。思いのままに食べて良いものがあふれていて、まわりの創造物はその神のすばらしさを、神の栄光を現すもので満ちていたわけです。ですから彼女は、神様が不当な制限を彼女にかけておられるという、その疑いをきっぱりと否定すべきだったのです。

しかし５節に「**あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。**」とあります。「目が開かれて神のようになる」というのは、肉体の目を言っているわけではありません。エバは見えていましたから。霊的な目、心の目です。神のようになるのだと、これは非常にエバをくすぐりました。神のようになりたいと、これはまさしくサタンが願ったことです。サタンの求めていたことです。神様はある意味、私たちが神のようになることを願っておられます、ある分野では。愛であったり、聖さであったり、正しさであったり、誠実であったり、柔和であったり、こういうことは、私たちが神のようになることを神は願っておられます。でも、神の主権や力、神の全知や何よりも神として礼拝される権威、それらについては、何者かがそれを求めたり、何者かが礼拝されようと願ったりすることに対して、神は断固として拒否されます。サタンが狙ったのは

それです。礼拝されるものになりたい、神より上になりたいと。でも、それは神様が利己的な方だから、そのように断固として拒絶されるわけではないのです。それは神の聖さからきています。聖いというのはどういう意味でしたか？切って分けられる、切り分けられることです。神であられるその神が、ほかのものが神として入ろうとする時、神様はそれを断固として拒否されます。栄光を受けるにふさわしい方は神のみです。礼拝を受けるにふさわしい方は神のみ、賛美を受けるにふさわしい方は神のみです。神の聖さゆえに、神様はそれをノーと言われます。

サタンはそれを知っていました。知っていながら、サタンはエバにその誘惑をかけてくるのです。神様は何者かが神と同等であろうと装ったり、認められようと望むことを断固拒絶される。それはこのイザヤ４２：８に書いてあります。「**わたしは【主】、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。**」と。それなのに、サタンはエバに対して、神の命令というのは神のささやかな嫉妬からくるものではないかと。あなたが神のようになることを、神は嫉妬されるのではないかと。だから命令され、あなたの権利に制限をかけているのではないの？と。逆ですよね。神はエバを愛しておられました。神はエバの最善を願っておられた。神はエバの益を願っておられた。だから、神のこの命令はエバを守るためです。エバを愛するがゆえの命令です。嫉妬からではないのです。先ほど言いましたエバは神のことばとサタンのことば、どちらに従うか、どちらに耳を傾けるか天秤をかけていた。私たちはいったいどちらに耳を傾けるのでしょう。いや、逆に、神のことば以外にいったい何者のことばに私たちは耳を傾けるべきなのでしょう。もし私たちが、神のことばから背を向けて、ほかの者に耳を傾けたり、ほかのものを優先したりすれば、それはすなわち偶像礼拝です。像の前に行って拝むことが、香を焚くことが偶像礼拝ではないのです。まことの神に背を向けることが偶像礼拝です。だからＩサムエル１５：２３にこう書いてあります。「**まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。**」と。

だからエバはこうあかしするべきだったのです。「いや、申しわけないけれども、神様は私に豊かに恵みを施してくださって、ありとあらゆるものから思いのまま食べてよいと言っておられる。私は神様を愛しています。神様も私たちを愛してくださっています。私たちはその神様の命令を守り、神様のみことばに耳を傾け、それに従うことが私たちの喜びです。私たちにとって何が最善か、神のみが知っておられます。以上」と。しかし、エバは自らの意思によってサタンのことばに耳を傾け、それを選択していきます。

「**善悪**」を知るようになることを神は知っているのです。この「**善悪**」というのは「あらゆる事柄」という意味を表します。ところが、ここでわざわざ「**善悪**」と書いているのは、善と悪という対立概念を書いているのです。善を取る者は悪を退けるし、悪を取る者は善を退けます。そして、「**善悪を知る**」のだと。ここでも「**知る**」が出てきました。旧約に出てくるこの「**知る**」ということばも、ここでは単なる情報を知ることではなくて、経験でもって知ることを表す単語が使われています。たとえば創世記４：１に、「**人は、その妻エバを知った。**」と同じことばが使われています。アダムはエバについての情報を知ったわけではないでしょう。もっと深い意味がありますよね。もっと親しいことを言っています。それと同じ単語が、この３：５に書いてあります。「**善悪を知る**」というのは、善と悪を経験で知るということです。善と悪は対立概念ですよね。善とは神です。Ｉヨハネ１：５に「**神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。**」、少しあるのではなくて、少しもない。善と悪は対立していますから。では、悪は何ですか？「**悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。**」（ヨハネ８：４４）と。少しいいところがあるわけではないのです。全くの悪なのです。善と悪は対立しているわけです。そして善と悪を知ると書いてあれば、私たちは、それは善というのはこういうもので、悪というのはこういうものですねと、情報で知るのではなくて、それに生きるということです。ということは、エバがここで天秤にかけているのは、その「**善悪を知る**」ということは、善に生きるのか、悪に生

きるのかだということです。しかし彼女は自らの意思によって、サタンのことばに耳を傾けていますから、悪というところに立って、彼女は善悪を知ろうとしています。

そして、エバは神のことばを退けるのです。自分自身で物事を決めたいのです。自分自身にとって良いことを選択したいのです。自分自身にとって正しいことを選択したいのです。自分自身の判断に信頼をしたいのです。神にとって良いことを選ぶのではなくて、自分自身にとって良いことを選びたいのです。神の前に正しいことを選ぶのではなくて、自分にとって正しいことを選びたいのです。神の判断に委ねるのではなくて、自分の判断に信頼したいのです。神の言われたことをそのまま受け入れることは、彼女にとっては愚かなことでした。彼女は知識を求めながら愚か者になっていくのです。当たり前ですよね。知識の初めは神を恐れることでしょう。そうすると、神に背を向ける者は愚か者の始まりですよね。詩篇１４：１「**愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。**」、神を否定してしまいました。「**……愚か者の前を離れ去れ。知識のことばはそこにはない。**」。彼女は知識を求めたのに、知識が離れ去っていってしまった。彼女は愚か者になっていたのです。

６節にいきましょう。「**そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。**」とあります。ショッキングなことが起きました。もうこの期に及んで、サタンはことばを発していません。エバに対して何も言わないのです。でも、神に背を向けてエバが自分から選択した悪に引き寄せられていっています。「**食べるのに良く**」と、彼女は園の木のどんな木からも食べることができたのです。でも、彼女はその木を見た時に、「**そこで女が見ると**」、これは「じっと見る」という意味のことばが使われています。彼女は今までそんなじっと見たことがなかったのでしょう。でも、彼女は初めてそれをじっと見ます。それは彼女にとってはとても良いものに見えたのです。たくさんの恵みにあふれているのに、彼女はその木に注目します。これは神様が彼女にとって最善であるということに対しての疑いからきます。神様は何か隠しておられるのではないか――。欲というのは決して悪いものではないけれども、それを神の目を通して見ないで、自分を満たすために見る時に、それは肉欲へと変わるでしょう。彼女は不義の欲からじっとその木を見て、それがとても良いと思うわけです。「**目に慕わし**」かったと。その外見も彼女の心を引きつけました。彼女は心からその木の実を欲しがったわけです。そして、「**賢くするというその木はいかにも好ましかった**」と。神のようになって、神のように賢くなるということは、彼女のプライドをくすぐりました。Ⅰヨハネ２：１６に「**すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。**」とあります。肉欲というのは、私たちのうちから現れます。「**目の欲**」は、外からくる要求に対して私たちが反応することです。「**暮らし向きの自慢**」はプライドです。何を着るのか、どこに住むのか、どんな車に乗るのか。エバはこの世のあらゆる悪に誘惑されて、心惹かれ、彼女の心にはどんどんどんどん貪欲が増し加わってきます。彼女は神に満足を求めませんでした。神のことばに満足を求めなかった。彼女は心の中の自分の欲求に忠実だった。神の最善に背を向けたその貪欲さ、むさぼり、それも偶像礼拝です。

コロサイ３：５に「**ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。**」。これがどんな記事か、覚えておられますか？コロサイ３：１－２に「**:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。**」、神を見つめていなさいと。あなたはキリストとともに葬られたのでしょう、十字架に架かって、あなたの古い性質は十字架の上で死んだのでしょうと。あなたは全く新しいものとして生まれ変わったわけでしょう。キリストとともによみがえらされたわけじゃないですか。キリストとともに天に座っているのでしょう。あなたはもう過去の古いものは過ぎ去ったでしょう。すべてが新しくなったわけでしょう。あなたがすることは、ただキリストを思いなさい。キリスト

に目を留めなさい、キリストに喜びを見いだしなさい。キリストのみに満足を見いだしなさい。キリストのみことばに心を従えなさい。キリストのみに拠り頼みなさい。もしあなた方が地上のものに目を留めるなら、そこに出てくるのは、すなわち不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼり、偶像礼拝だと言うのです。

神に背を向けて、神以外のものに礼拝する、神以外のものに礼拝を捧げる。神以外のものが自分にとって大切になっている。そして彼女は天秤にかけて、見事にそれを実行に移します。「**それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。**」。彼女は食べました。神の命令よりも自分の意思を尊重したわけです。神に背を向けて、自分に忠実であろうとしたわけです。それは、神が神であるがゆえに、お座りになっているところから神を引きずり下ろして、自分がそこに座ることです。だから詩篇５０：１７で神はこのように警告されています。「**おまえは戒めを憎み、わたしのことばを自分のうしろに投げ捨てた。**」と。「**:21 こういうことをおまえはしてきたが、わたしは黙っていた。わたしがおまえと等しい者だとおまえは、思っていたのだ。わたしはおまえを責める。おまえの目の前でこれを並べ立てる。:22 神を忘れる者よ。さあ、このことをよくわきまえよ。さもないと、わたしはおまえを引き裂き、救い出す者もいなくなろう。**」、なのに彼女は実行に移すのです。彼女はその木の実を取って食べました。

そしていっしょにいた夫にも与えたのです。アダムよ、今までどこにいたの？聖書にははっきり書いていないからわからないです。もしかしたら１節のサタンがエバに話しかけている時からいたかもしれないし、途中から来たかもしれない。少なくともアダムはエバがその木の実を取って食べるのを見ていました。それが神にノーと言われるものであることも、アダムはもちろん知っていました。エバが欺かれて、エバが罪を犯しましたけれども、決して聖書はアダムの罪がエバよりも小さいとは言っていません。むしろアダムの罪の方がエバよりも大きいと。Ｉコリント１５：２２に「**アダムにあってすべての人が死んでいる。**」とあります。ローマ５：１９「**ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされた**」、この「**ひとりの人**」というのはアダムのことを指しています。アダムの不従順によって多くの人が罪人にされたと。アダム自らが不従順の罪を犯したというわけです。彼は人類の代表として、頭として、堕落を選択しました。この責任は、ずっと私たちに受け継がれています。堕落の最終的な責任を負ったわけです。

７節「**このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。**」。ふたりの目は開かれました。でも、かなりゆがんだ形で開かれました。彼らは全く別の立場に立たされました。神と親しい交わりを持って、神を愛し、神に愛される者から、全く別のもの、神に呪われるもの、愚か者へと、邪悪な者へと彼らは変わった。この世で生を受けた者の中で、罪を持っていない人間が３人いました。それは、この罪を犯すまでのアダムとエバ、彼らには罪がありませんでした。そしてもうひとり、罪がない人間は、主イエス・キリストです。彼らはその純潔を失ったのです。その罪によって打ち砕かれました。彼らは裸でした。それは彼らにとっては決して恥ずかしいことではありませんでした。それは神の最善のうちに彼らがいたからです。彼らが裸であったのは、神の最善でした。彼らは神の前に何も隠す必要がなかった。神の前に隠れる必要もなかった。神との親しい交わりだったから。しかし、今や彼らはこの時の霊的な死によって恥が与えられ、罪悪感が与えられ、神の前で腐敗したものとなり、邪悪なものとなり、神の前に恥辱の者と変えられたのです。彼らはもう神の前に立てなくなった。そして彼らはそのことを悔い改めもしません。神の前に尋ね求めることもしません。ただただ自分の恥を隠す努力をします。イチジクの葉をつづり合わせて、それを腰に巻いたわけです。自分の努力でその恥を隠そうとした。まさしく、まさしく罪人の姿です。神に背を向け、自分の努力で自分の救いを得ようとする。

ところが、あわれみ豊かな神は、アダムとエバをあわれみでもって扱われます。創世記３：２１「**神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。**」。この地球上で初めていのちが失われた瞬間です。この地球上で初めて血が流された瞬間です。神は初めて獣を殺して、その皮で覆

いを作ってくださった。これは私たちに与えられた救いの型です。義認の型です。義認とは、主イエス・キリストが持っているその義を、私たちの上に覆い被されることです。だから、神様が私たちを見た時に、キリストの義が私たちを覆っているので、もはや私たちを罪人として見ないのです。キリストの義が覆っている、それの型です。「**それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。**」（ヘブル９：２２）、やがて主イエス・キリストの十字架が、私たちの罪の贖いのために備えられることになります。

エバは大きな間違いを神様に対して犯しました。大きな間違いを彼女が犯した。何だと思いますか？何が最善か、何が最善でないかは、自分が判断できると勘違いしたわけです。たとえば神様がどういう方か、神学的用語で言うと属性、神様の本質。何が聖くて、何が愛であり、何が最善であり、何があわれみなのか、それはどこからきているかと言うと、神様ご自身からきているのです。神様は、聖さそのものなのです。だから、何が聖くて、何が聖くないか、神が決められるのです。神は愛そのものなのです。何が愛で、何が愛でないかは神が決められるのです。たとえば私たちの心のうちに、こういう人が聖いですという基準があって、私たちが心のうちに持っている基準に、神が当てはまるから神が聖いのではないのです。私たちの心の中に価値観があって、その価値観に神が当てはまるから神が聖いのではないのです。神が聖いのです。私たちの価値観をそこに合わさなければいけないのです。なのに私たちそれを勘違いして、最善はこれですと私たちが決めて、神様がその最善に合わなかった時、神様、あなたは最善ではないということになるのです。神様、あなたはあわれみではない、神様、それは愛ではないと。私たちの考えた愛は違う、私たちの心のうちにある愛の基準は違いますと。自分の基準に神様を合わせようとするのです。これは偶像礼拝です。

神様がなされることは最善だから、教会の中で皆さんに起きることで、なぜ泣いているの？と言うつもりは一つもありません。みことばにも「**喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。**」（ヘブル１２：１５）とあります。皆さんの中の大切な方が亡くなったら、それは悲しいですから、いっしょに泣くでしょう。でも、私たちが置く信仰というのは、神はすべてのことを最善をなさっておられるということです。私たちはつい人と比べてしまいます。同じクリスチャンでしょ、神様、同じあなたの栄光を現すために私たちは救われるわけでしょう。だったら、なぜこの人は豊かな中で神様の栄光を現して、私は貧しさの中で神様の栄光を現さないといけないの？と。神様、必要を与えてくださいよ、神様、私、必要があるのですよ、なぜ黙っておられるのですか？と。なぜ私の祈りは聞かれないのですか？と。健康な人が健康を通して神様の栄光を現している、神様、私はなぜ病なのですか？と。なぜ私だけなのですか？と。私元気だったら、トラクト配布行くのにと。神様、それはあなたの最善ではないですよと。あなたが最善の計画を私になしてくださるの？と。聖書を見た時に、私たちひとりひとりの名前を神様はご存じで、世界の基が置かれる前から、私たちを名指しで選び出してくださり、私たちを救い出してくださり、キリストと一つにしてくださったわけでしょ？だから、私たちひとりひとりにそれぞれ神の計画があるのです。その目的は、神の栄光です。救いの目的は神の栄光です。それぞれ置かれたところで、神様それぞれに最善をなしておられるわけです。それなのに私たちはそれを神様にノーと言うわけです。申しわけないけれども、確かに私に与えられたもの、これは恵みです。神様この恵みを与えてくださってありがとうございます。でも神様、これは違います。私にとっては最善ではないです。神様、かえてください、これを与えてくださいと。私を癒してくださいと。なぜこの人は家族に対してトラブルがないのに、私はトラブルがあるのですか？と。なぜこの人は仕事場でゆったりと仕事ができるのに、なぜ私の仕事場はいつもトラブルがあるのですかと。神様、あなたは最善ではないと、その座から神様を引きずり下ろして、自分がそこに座って、自分がいかにも正しいこと、自分がいかにも愛があること、あわれみがあること、誠実なこと、最善なことを知っていると神様に言っているわけです。悲しむなと言っているわけではない。でも、私たちが目を置くところは、神様ご自身なのです。私たちの環境ではない。だから私たちの

喜びも満足も、何かが変えられたから与えられるのではないのです。祈りが聞かれたから私たちは満足するのではないのです。祈りが聞かれたから私たちは喜びを持つのではないのです。神様ご自身が私たちにとって満足なのです。神様ご自身が喜びなのです。だから神様ご自身を見ないと、私たちは本当に満足と喜びを与えられない。

その罪はどこからきているのかと言うと、この３章からきているのです。私たちキリストと一つにされました。そして私たちこの地上では、この世の人が求めているような喜びはない。なぜなら、キリストはこの世で貧しく、キリストはこの世で苦しまれ、キリストはこの世で死にまでも神に忠実だった。私たちがキリストと一つにされるということは、私たちは心がキリストで満たされるということだけではなくて、キリストが歩まれたように私たちが歩むということは、やがて私たちにも苦しみがあり、私たちにも貧しさがあり、死まで忠実を求められることがあるということです。だから、だれがイエス様の右に座るか、だれが左に座るかと弟子たちが争っている時に、イエス様があなたは私の杯を飲む気があるか、私のバプテスマを受ける気があるかと尋ねると、彼らはのんびり「はい」と言いましたけれども、彼らがキリストと一つにされた時に、あの弟子たちも死にまで忠実でした。私たちはそれを求められているのです。

苦しみがある天国、苦しみがない地獄という話もしました。あれは、あながちみことばが何も言っていないことではありません。この世のことを言っています。私たちが神とともに歩む時に、私たちはこの世の中で苦しみがあります。この世の中の人は楽しみだけを求めます。でも、神との交わりがないのです。神とともに歩んでいない、神と断絶があるのです。私たちはどっちを喜びとして見ているのですか？この地上で苦しみがあっても、私たちに納得できないことがあっても、神が最善であるということを信頼して、神様のみを見つめて、神様のみに満足して、私たちがこの世の中を喜びを持って歩んでいる時に、その先が神がともにおられる天国でしょう？私たちの価値はどこにありますか？でもね、このアダムとエバの罪が私たちに入った時、神様はなんと主イエス・キリストを送られて、私たちが神と親しい交わりを回復するだけではなく、キリストと一つにされるまで、神様は私たちに恵みを注いでくださっている。もう何も要らないでしょう。私たちに本当の満足を与えるものは、もう私たちに与えられている。キリストと一つにされて、私たちはそれを見つめることです。